研究

隅田川に架すべき六橋は同一樣式たるべし

内務省都市計畫局
第二技術課長　野田俊彦

隅田川に架すべき六つの橋を同一樣式と爲すべきか否かといふ事が當初問題になつて盛んに論究せられたが、とう〳〵個々別々說が勝つたんだと言ふ事だ。惜しい事をしたと思ふ。

現在實際この個々別々主義で進行して居るのか又個々別々主義も何の程度に個々別々なのか判然たる事は聞いて居ないが、新聞其他に依つて得た私の知識が若し正しければ一考を要する事だと思ふ。

私はこの問題が論議せられた時樣式を一にする事を主張したものは恐らく設計費及工事費を節約し得るの一點を以て個個別々說に抗したこと丶想像する。各の橋につき夫々の設計を爲すを理想とはするも費用節約の點から同一設計を採るを利益とすると說いたに違ない。私の考はさうではない。費用節約も一つの有利な點とする事は勿論であるが、其點以外に

同一設計を理想的なりとするものだ。

私の見せて貰つた設計はその外廓のみ辛うじて知り得る略圖に過ぎなかつたので詳しい事は分らないし、記憶も曖昧だが上流から下流のに向つて並べられた六つの圖の第一と第二とは全然異い、第三もまた別の格好をして居る。第四は第二に類し、第五は第一に似てる、といふ風であつた。何の必要からこんなに異違があるのか又何の原因がこの亂雜な變化を生んだか全く吾人の了解に苦しむものだつた。

「異る場所に設けられる以上同一條件を有する筈はない。從つて出來上るものも同一物たるを得ない」といふ抽象論から出發して、各擔任の設計者がてんでん勝手な、條件の變化に無關係に個々別々なる。六個の橋梁の見本を作つて陳列するのは、一つの責任者のする、統一ある仕事とは考へられない。

この變化を生ぜしむる原因としては同一樣式で六つの橋が並んでは單調無味で都市の美觀を損ずるだらうといふ考が大きなものたるは明白である。

同じものが六つ並ぶと果して單調だらうか。同じものが並んで單調を感ぜしめる時もあるし然らざる時もある。散歩する多くの男女が盡く同一服裝をして居たらば定めて單調でもあらう。然し整列した兵士の制服は何萬並んでも皆な一樣で何等單調の感を生ぜしめない。生れてから死ぬ迄毎日毎日米の飯を食つて我々は單調を感じて居ない。人間の顔は誰れのを見ても鼻は一つに眼は二つ、凡てが一樣であつて例外が無い。それで居て決して單調ではない。尙ほ詳細に之れを檢すれば、高い鼻もあればペッチャンコのもある。十人十色で變化極まり無い。神樣の爲したこの仕事には何等變化も求め樣と藻掻いた跡がないがそこに測り知る可らざる變化の妙味がのある。不必要なるものの反覆せらるゝ時初めて單調の感を生ず。同一たるべき理由を有するものは幾つ並んでも同一樣式で支障よい。單調なるを恐れる必要はない。

この六つの橋は之れを大觀すれば東京の東を流れる隅田川に架つて何れも京橋日本橋淺草の商業中心地と本所深川の工業地帶とを結んでゐる。その長さに於て、必要なる幅員及頭室に於て、地盤に於て、水流に於て、或は船舶の航行を防害せざる裝置の必要の有無に於て、又は之を通行する人馬荷物の種類に於て何等大差あるを認め難い。細い事を言へば限はなし。兎に角異れる場所に架るものなれば全然同一なる條件を有する筈なし。その環境に至つては非常に違異ありと言はば言はるべし。然しこれ等と雖も一をワーレントラッスとし

他をカンチレバートラツスと爲す程度では斷じてない。駒形橋には復興の象徴として獅子をつける由なるも他の橋には復興の象徴不用あるや。或はその環境に應じ象をつけたり虎をつけたりするや。少しつゝ異なる條件に夫々應ずする如く適當なる變化を有するは望ましく、出來る丈けさうあり度き事なれども大體は一にて可なり。寧ろ一に非れば不可なり。隅田川に架せし六つの橋は之れを例ふれば一つの廣間より中庭に開ける六つの窓なり。同一樣式にて何等美感を損ずる事なきのみならず、一々異りては却つて煩瑣不統一の感を生む。

外國の都市に同一樣式の橋が並んで架れる實例無きを氣にする要はなし。六つの橋を同時に架けたる實例が無きなり。學問は日進月歩なり。假令一年でも二年でも後れて現はるゝものは異りたりとて不思議なし。市内各所に架けらるゝ橋も漸次その必要を生じ順次その實現を見るなり。千變萬化も止むを得ずと言はゞ言はれぬ事もなかるべし。今の場合は之れとは異なり。同時に、同一機關により最善なりと信ぜらるゝもの六種出來上るはどう考へても不合理なるが如し。

世の中は輕調浮薄となり藝術といふ事大流行より。猫も杓子も藝術を理解するが如き顔付をするを得と悟れり。市中の橋梁は實用品たると同時にまた一種の藝術品なり、といふ西洋人や所謂藝術家の言を無批評に採り入れるは吾人の躊躇する處なり。吾人は技術家として自信ある處を遂行したし。市民若くこの誤つた美感を橋に要求するならばその誤を正し吾人の信ずる方向に向はしめたい。

◎南洲翁遺訓

正道を踏み國を以て斃るゝの精神なくんば、外國交際は全かるべからず。彼の强大に畏縮し圓滑を主として、曲げて彼の意に從順するとそは、輕侮を招き親和却つて破れ、終に彼の制を受くるに至らん。